

第3回

しなのちの作文 コンクール



作品集

もくじ

◆入賞作品

〈小学校低学年の部〉

最優秀賞

加西市立宇仁小学校

二年 鷹取 遵

優秀賞

大和高田市立土庫小学校

二年 新堂 鳳也

檀原市立金橋小学校

二年 駒井 湊

宇陀市立榛原東小学校

二年 玉村 空蓮

〈小学校中学年の部〉

最優秀賞

王寺町立王寺南義務教育学校

四年 東 佑真

優秀賞

香芝市立下田小学校

四年 山本 珠寧

王寺町立王寺南義務教育学校

三年 川畑 心花

王寺町立王寺南義務教育学校

四年 須堯 小都

〈小学校高学年の部〉

最優秀賞

葛城市立忍海小学校

五年 辻本 愛奈

優秀賞

大和高田市立高田小学校

五年 曾我尾 桃子

五條市立五條小学校

六年 榮田 恋華

御所市立葛小学校

六年 河野 那津

〈中学校の部〉

最優秀賞

王寺町立王寺北義務教育学校

八年 尾仲 佑太

優秀賞

山添村立山添中学校

三年 山口 智子

王寺町立王寺南義務教育学校

七年 井上 結衣

王寺町立王寺北義務教育学校

八年 濱端 祐介

◆佳作受賞者一覧

◆学校賞一覧

◆第三回奈良県「いのちの作文コンクール」審査委員

〈小学校低学年の部〉

今日も心をこめて「いただきます」

加西市立宇仁小学校

二年

鷹取 遵たかとり まもる

ぼくは、食べることが大好きだ。とくに、きゅう食のからあげは、ころもがカリッとしていて、肉じゅうがジューっとしていて、さい高だ。だからぼくは、きゅう食の時間にはだれよりもはりきって、「いただきます。」

と、
「ごちそうさまでした。」
を言う。ごはんをつくってくれた人たちに「ありがとう」の気もちをつたえるために、大きな声で言う。だけど、このことばがただのあいさつではなく、食ざいとなった命へのかんしゃのことばだと教えてもらったとき、心がズーンとおもたくなった。

ぼくは、すべての命が同じくらい大切だと思っている。たとえば、はたけで大切にそだてた白さいも、みちばたにさいているタンポポも、ペットのカメも、ぼくの命も。命にじゅん番はつけられない。なのに、へい気でお肉やお魚、やさいを食べている。とってもおかしなことだなと思った。だけど食べなくては生きていけない。ぼくは、ほ

かの命をいただいて、その命とつながって生きているということに気がついた。

それからぼくは、もっとはりきって、

「いただきます。」

と、

「ごちそうさまでした。」

を言うようにしている。かんしゃの気もちで、ぜったいにのこさいい。

ぼくは今、いろんな命にささえられて生きている。ぼくがせいっぱいがんばって生きることが、いただいた命へのおんがえした。



これからもがんばる。

大和高田市立土庫小学校

二年 新堂 鳳也
しんどう たかなり

ぼくは、どうぶつもにんげんもおなじいのちだとおもいます。いのちがなくなったら、かなしいです。

ぼくのいえには、三びきの犬がいます。ぼくは、ごはんをあげたり、からだをあらってあげたり、あそんであげたりしています。ドッグフードをあげたら、よろこんでくれて、ぼくも、うれしいきもちになりました。これからも、いっしょにいたいです。

ぼくには、おとうとが一人というとうとが三人います。いちばん下のいもうとは、ことしのなつにうまれました。うまれてからあいにくと、小さいこえでなっていました。からだの大きさが、パパの手ぐらいの大きさでした。ミルクをたくさん飲んでいて、とてもかわいかったです。

さいごに、おかあさんにメッセージがあります。

みこをうんだおかあさんへ

みこをうんでくれてありがとう。

がんばってくれてありがとう。

みこちゃんにあえてぼくはうれしいです。きょうだいや犬をぼくがまもっていきます。



いのちのたいせつさ

檀原市立金橋小学校

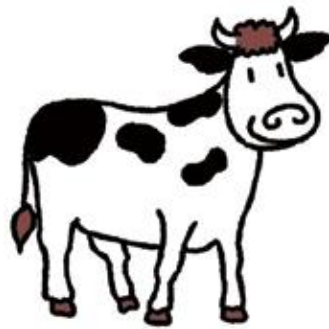
二年 駒井 湊 こまい みなと

ぼくは、うだ・アニマルパークでいのちのべんきょうをして、どうぶつからたくさんいのちをもらっているんだと思いました。ぶたからは、お肉をもらっているし、牛からもお肉をもらっています。牛にゆうは、ほんとうは、牛の赤ちゃんがのむものなのに、ぼくたちがのんでいます。にわとりからも、お肉をもらっていて、ほんとうは赤ちゃんが生まれるはずだったまごも、ぼくが食べています。どうぶつからは、いっぱいいのちをもらっているなと思いました。

だから、ぼくはこれからのちをもらっていることにかんしゃしていきます。

「ありがとうございます。」

と思しながらごはんを食べたいと思います。



オオカマキリ

宇陀市立榛原東小学校

二年

玉村 たまむら
空蓮 あれん

ぼくは、カマキリをつかまえました。うんどう場のかいだんでつかまえました。さいしよは、なにカマキリかわからなかったけど、ともだちにおしえてもらいました。

「オオカマキリやで。」

と、ともだちがおしえてくれました。

えさはタブレットでしらべました。カマキリのえさはバッタです。

つぎにカマキリのへやをつくりました。土と草とはっぱと水をす

こし虫かごに入れました。

もしかしたら、たまごをうむかもしれません。なぜなら、おなか

大きいからです。ある日たまごがうまれました。ぼくは、たまごをう

んでるところを見ました。

前にいのちのべんきょうをしたので、カマキリもいのちがあるん

だなと思いました。

カマキリがたまごをうんでいるところは、5はんの子と見ました。

5はんの子が言いました。

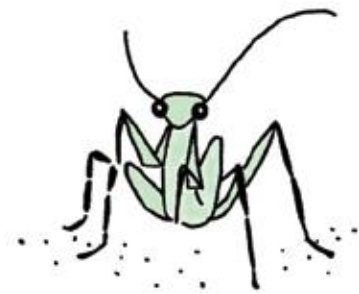
「すごいな。」

つぎにぼくも言いました。

「ほんまやな。すごいな。はじめて見たわ。」

たまごをうんでかわいくなりました。カマキリのたまごから赤ちやんのカマキリがうまれてほしいと思いました。

これから、カマキリがしないようにだいにしたいです。



〈小学校中学年の部〉

命

王寺町立王寺南義務教育学校

四年 東 佑眞
ひがし ゆいま

ぼくの家では魚をかっています。ふだんはお父さんが世話をしています。お父さんが二週間、出ちように行くことになって、ぼくがエサやりをすることになりました。

「佑眞君エサやりのおむな。エサやりは、一日くらい忘れても大丈夫やで。」

と言われました。でも、ぼくは、エサやりを二回も忘れてしまい、ぼくは「やってしまった。」とあせりました。でも、魚を見ると元気よく泳いでいて安心しました。今回はよかったけど、魚は、自分が世話をしないと死んでしまいます。自分のことだけ考えていたらだめなんだと思いました。

ぼくも、飲まなかったり食べなかったりしたら、元気ですごすことができません。お父さんやお母さんたちが働いてくれたり、お米や野菜を作ってくれる人たちがいるから、ぼくは食べることができます。

多くの人に支えてもらいながら、ぼくは生きています。生きていくからこそ、動いたり、勉強したり、友達と遊んだり、と人生を楽しむことができます。いろんな人に支えられている命を大事にしていきます。そして、ぼくも、ぼくを支えてくれている周りの人のように、多くの人を助けられるような人になりたいです。

友達のいのちも自分のいのちも大切に

香芝市立下田小学校

四年 山本 珠寧 やまもと ことね

わたしは、いのちは一つしかないから大切だと思います。うだ・アニマルパークの人が、「人も動物もいのちは一つ。」と教えてくれて、一つのいのちがなくなると生き返れないことを知ったからその一つのいのちを大切にしようと思いました。

わたしはこんなけい験をしたことがあります。三年生の時、友達二人と運動場のすべり台で三人でつかまっていききにするという遊び方をしようとしていました。運動場へ向かっていると、ろう下ですべり台が滑ったので友達に、なにごぼかを聞かれました。

「運動場のすべり台で三人でいききにすべって遊ぶんだ。」
と、わたしたちが言うと、その友達が

「そのすべり台はすべる所がでこぼこしてるよ。三人ですべるんだったら、前の人にぶつかってうしろにたおれた時に、出っばって出る所に頭を打ちつけたら、いのちに関わるからあぶないよ。」

と教えてくれました。それを聞いたわたしは、うだ・アニマルパークの人が、人も動物もいのちは一つと教えてくれた言葉を思い出して、三人ですべろうとてい案した友達に、

「あぶないからやめよう。」

と言いましたが止めきれず、することになってしまいました。すべっている時に出っばりで足を打ちましたが、三人ですべるのはあぶないよと教えてくれた友達の話を聞いた先頭の友達が、ゆっくりすべってくれたので小さなけがが済みました。その友達があぶないと教えてくれていなかったら、大けががでしんでしまっていたかもしれないと思いました。

このけい験があつてから、大けがをするかもしれないと教えてくれた子のように、なっとくがいく説明を言えるようになってきました。自分も友達もいのちは一つだから大切にしようと思います。

大切な命への感しやの気持ち

王寺町立王寺南義務教育学校

三年

川畑 かわはた 心花 こはな

私はいろいろな物に命があることを知りました。そして、その一つ一つの命を大切にしていこうと思いました。

私は今年田植えといねかりをしました。二つとも、とても大へんでした。お米を育ててくれる農家さんは、こんなに大へんな仕事をしていると知ったので、農家さんががんばって育ててくれたお米をいつもよりも、しっかり残さず食べようと思いました。そして、お米も生きてるので、感しやの気持ちもこめて食べようと思いました。野菜も、魚も動物たちもみんな生きています。その生き物は、私たち人間のために命を落としているのです。かわいそうだとはじめは思いました。でも、もう今はそうは思いません。

「ありがとう。」

そう思うようになりました。だって、その生き物たちのおかげで、今こうして幸せに生きられているからです。世界中には食べ物に困

っている人はたくさんいます。その人たちを助けることはできないけど、今できることはあります。それは、しっかり残さず食べることです。そうすれば、食べられた生き物も、食べ物に困っている人も、悲しい気持ちにはならないと思います。なので私の目標は、「感しやの気持ちで残さず食べる」です。当たり前のことですが、これを毎日つづけられるといいなと思いました。

私たちがもつめる幸せは、起こりませんが、今ここにいるだけで幸せなのです。

みの周りには命をもっているものがほとんどです。それは全て生き物なのです。その生き物たちのおかげで、私たちは幸せになれているのです。人間の力で、こんなに楽しいくらしなんてできません。これからは、食べ物、植物、すべての命に感しやをしようと思います。

大切な命

王寺町立王寺南義務教育学校

四年 須堯 すぎょう 小都 こと

生まれてくることは奇跡なんだと思いました。なぜならわたしが生まれる時、母は「早期胎盤剥離」に、なったそうです。その病気を調べてみたら、赤ちゃんへ酸素と栄養をおくる胎盤が子宮からはがれてしまい、赤ちゃんはとても危険な状態になります。母体にとっても出血などの命の危険があるそうです。そんな中わたしは元気に生まれてくることができ、母も無事でよかったです。その後も元気に遊んでいました。そんな危険なことがあったのに、こんなに元気でいれて幸せだなあと思いました。そして半年ほどたつと、離乳食も食べられるようになったり、しゃべったりするようになったそうです。わたしが二才になって弟が生まれました。弟の時は、「早期胎盤剥離」にならなくて、よかったですと母が言っていました。母と弟が退院してきた時、わたしはよくお手伝いをしていました。

弟のかわいい小さな手をたたいていっしょに遊んだりもしました。ほっぺもぶにぶにしていたとてもかわかったことをおぼえています。叔母が作ってくれた、どんぐり帽をかぶっている弟のすがたはかわいくても心にのこっています。

何事もなく、元気に生まれてきて普通のことができるというのはあたり前ではないんだと知りました。そして赤ちゃんや小さい子どもは、ほんの少しのことで命にかかわるけがをしたり、亡くなったりしてしまいます。なので大切に育ててもらったんだと思いました。

この命をこれからも大切にしていきたいと思いました。

〈小学校高学年の部〉

愛犬のハル

葛城市立忍海小学校

五年 辻本 愛奈
つしもと まな

「まだいらない！」

私は大声で叫びました。昨年こぞの五月、愛犬のハルが九歳で亡くなりました。肺ガンでした。私が産まれた時とほぼ同時に我が家の家族になったハルは、おとなしくかしこい女の子でした。私の成長と共に育ってきたハルは、静かに見守ってくれるお姉さんのような特別な存在でした。そのハルが亡くなって二週間も経たないうちに、お父さんが、新しいわんちゃんを迎え入れようと言いだしたのです。

「ハルが亡くなったばかりなのに、新しい子を迎え入れるなんて考えられない。」

私の心はまだ悲しみでいっぱいでした。お父さんはハルのことをもう忘れてしまったのだろうか。どうしてそんなひどいことを言うのだろう。私の不安やいら立ちに気付いたお父さんは、新しい子を迎え入れようと思った経緯を話してくれました。その子は、生後二ヶ月の

女の子で、御夫婦と赤ちゃんのもとで飼われていましたが、赤ちゃんに重いアレルギー症状が出た為、譲渡先を探されているという事でした。私の心はゆれ動きました。ハルは忘れないでと悲しむかもしれない。けれども、行く先がない小さな命をなんとか救ってあげたい。私は強く思い始めました。そして、その決断に天国からハルが背中を押してくれているように思いました。

私は動物の死に初めて向き合い学んだことがあります。それは、動物は私達より進む時間が早く、先に死んでしまうということ。だから、一緒にいられる間は心から愛して、死の悲しみも受け入れる覚悟が必要だということです。命は永遠には続かない。充電することでもできない。だからこそ命はかけがえのない尊いものだと思えました。多くの命のもとに生かされていることに感謝して、一日一日を大切に過ごしていきたいと思えます。

命ってなに？

大和高田市立高田小学校

五年 曾我尾 桃子
そが お ももこ

命ってなんだろう？命はどこから産まれたのかな？命がなくなったらどうなるのかな。最近ぼんやりとそんなことを考えることが増えた。

私が二才の時、弟が産まれた。その時みんなが喜んで、泣いていた。みんなが、

「ママ、がんばったね。弟君もがんばったね。」

と言って、弟をたくさんだっこしていた。私もだいてみて、とてもあたたかかった。なぜかほっとできるようなあたたかさだったことをすごく覚えている。命は、あたたかいのかな。人が産まれたら、みんなどうしてよろこぶのかな。新しい家族ができたから？無事に産まれたから？

お父さんに聞いてみると、「全部だよ。家族が増えて嬉しいし、ママと赤ちゃんが元気でいてくれるから喜んでいるんだよ」と教えてくれた。命がなくなったらどうなるのかな？ふとそんなことを考え

た。

昨年、九十五才のおじいちゃんが亡くなった。大好きだったおじいちゃんが、眠っているみたいに入っている箱があったので、おじいちゃんに触れてみた。とても冷たかった。人は死んでしまうとこんなに冷たくなるのかと、おどろいた。生きるって温かいんだとその時気が付いた。とても悲しくて泣いていると、周りの大人達もみんな泣いていた。でも、おじいちゃんが元気だった時の話もたくさんして泣きながら笑い合っていた。私の知らないおじいちゃんを知ることができて少し嬉しかった。

私が考える命は、「生きる」だ。息をして、ごはんを食べて、大切な人と話して、笑い合う。ふつうに生活できることこそ私が考える「命」だ。命は死ぬとなくなる。でも、私は死んでもあり続ける「命」があると思う。それは、家族や友達に覚えておいてもらうことだ。人に覚えておいてもらったら、自分が亡くなっても、さびしくない人生を送れたと感じることができるから。

だから私は、みんなに覚えておいてもらうような人生をおくりたいと思う。

大事な人

五條市立五條小学校

六年 榮田 えいだ 恋華 れんか

みなさんは大切な人をなくしたことはありませんか。私はありません。

私には大事な祖父がいました。祖父は優しくて頼りがいがあって大好きな人でした。祖父は生前、大工をしていました。何度か見たことはありましたが、大工をしている祖父は輝いて見えました。そんな祖父は七十六歳で亡くなりました。棺から見る祖父は、今からでも起きるんじゃないかと思うことがありました。祖父が亡くなり、後悔はたくさんありました。もっと旅行をしていけばや、思い出を写真に残していればなど後悔は日に日に多くなっていききました。祖父の家は近くにあり、家に行けば必ずいつもの椅子に座っている祖父の姿がありました。あの日から家に行っても祖父はいない、あの椅子にはもう祖父は座っていないんだということ、大事な人っていないなくなっただけから気づくものなんだという事がわかりました。祖父の亡くなった姿、思い出の写真、仏壇。これらを見て感じたことのない悲しさ、寂しさ

が私を襲いました。タオルで拭いても、拭いても出てくる涙。今までも泣いたことはたくさんありました。母や父に怒られた時よりも、切ない話を聞いたときよりも、比べ物にならないぐらいに泣きました。命は、私達が思うほどにすぐに壊れてしまうんだ、大事な人ほどすぐにいなくなってしまうんだということを、祖父を亡くしてから初めてわかりました。命は他に換えられないからこそ大事な人との思い出を大切にしたいと、命を大切にしたいと思いました。

命と心

御所市立葛小学校

六年 河野 那津
かわの なつ

「時間の長さが幸せとは限らない。」

じゅう医さんの言葉で私はハルと一緒に生きていこうと決めた。

ハルは十さいの保護犬。人間で言う六十さいくらいのおばあちゃんだ。譲渡候補犬のハルに出会った時、母は、

「古い先短い老犬よりも、若い犬の方がいいんじゃない。」

と言った。でも、私の中での「飼いたい」という心は助けたいや支えたい、一緒に幸せになりたいという気持ちであった。この気持ちには年れいなど関係ないと思う。そう思えたのはじゅう医さんの

「どれだけ生きるのかではなく、どう生きるか。」

という言葉のおかげだった。

犬の里親になるのは、その犬の人生の中からで、過去を知ることができない。それは悲しいことかもしれない。でも、この悲しいと思うのは人間だけで、知りたいというのは人間の自己満足でしかない。

私はハルとのこれからを大切にすることの方が必要だと思う。

私はハルと出会って「命」と「心」の二つがある理由に気づいた。

「命」というのは平等であり、守らなければならない。「心」はそれぞれがもっていて、傷つけてはいけないものだ。でも、ハルはどちらもきつと守ってくれる人がいなかったのだろう。毎日死ぬか生きるかをつなわたりのように生きてきたんだと思う。命を守ることだけで精一ぱいで、きつと心を大切にされてこなかった。

今日もハルは私のとなりでねいきを立ててねむっている。そんなハルを感じている私はとても幸せだ。ハルの幸せは私の幸せだ。これは私とハルのストーリーだ。私とハルだけが幸せではなく、たくさん命が幸せになってほしい。でも、私の力だけでは実現できない。だから、社会全体で知って、考えて、行動することが必要なのだ。命の大切さは目には見えない。そして、心も目に見えない。見えない心で命の大切さを感じなければならない。

〈中学校の部〉

罪のない動物たち

王寺町立王寺北義務教育学校

八年 尾仲 佑太
おなか ゆうた

私の祖父は、畑で野菜を作っています。家族や近所さんに配る為に、一年を通して様々な野菜を無農薬野菜で作ってくれています。

今年の夏もそうでしたが、ここ最近、毎年のように畑に動物が来ては、収穫前の野菜を食べていくようになりました。

祖父もこれまで、野菜などに防護ネットや動物が嫌がるような匂いや物で、対策をとっていたようですが、それでも被害が減らない為、今年ついに駆除することにしました。檻を畑に置いた数日後、アライグマが檻に入っていたようで、その日の内に、アライグマは役場の人に引き取られたそうです。恐らくその後は、殺処分されたのではないでしょう。その日、役場に返却する為に置いてあった空の檻を見て、複雑な気持ちになりました。

アライグマは、動物園で見ると、とても可愛い動物です。以前は、アニメの影響もあり、ペットとしても飼っていたようですが、気性が

荒く、自宅で飼いきれなくなった人が手放したことにより、野生化が進みました。繁殖力も高く、また日本には天敵もない為、次第に数も増え、人々の生活も脅かす存在となりました。

手放した時は、たった一頭だし、動物にとっても自然の中で生きていく方が幸せだろうと、軽い気持ちで手放したのかもしれませんが、しかし、その「いのち」は、何倍にも膨れ上がり、反対に多くの「いのち」を奪い取るにつながってしまいました。

私達は、動物と共に暮らす事を選択する時、ただ「可愛いから」という安易な考えではなく、人間と同じように病気や怪我をするし、大きくなり歳をとっていく動物たちを最後まで責任をもって共に生きていけるのか、「いのち」あるものだから、今一度、慎重に考えて選ぶべきだと思います。

パンジーがくれたもの

山添村立山添中学校

三年 山口 智子
やまぐち ともこ

私の家では猫を飼っていました。色は白で名前はパンジー。いつから飼っていたのか分からなかったけれど、私が幼い頃の写真にも写っていたから、長い間一緒にいたのだと思います。

私が小学校高学年になると、私がえさをあげることが増えました。パンジーはおばあちゃん猫だったので、目があまり見えていなかったと思います。ですが、えさを収納しているドアを開けると反応し、近づいてきました。カリカリと、えさを食べているパンジーを見ると、穏やかな気持ちになりました。

一つだけ、残念なこともありました。それは、パンジーがなでさせてくれなかったことです。私が触れようとすると、するりと逃げてしまったり、怒ったように鳴き声をあげたり、あまり人懐っこい感じではありませんでした。

学校へ行くときは「いってきます。」帰った時には「ただいま。」私はそうパンジーに声をかけるのが好きでした。

しかし、その挨拶は突然なくなりしました。二、三日パンジーを見かけませんでした。

「猫は死ぬ時、どこかに行ってしまう。」

と母は言っていました。ああ、パンジーは死ぬのが自分で分かって、家を離れたんだな、と私は思いました。不思議と涙は出ませんでした。覚悟もしていたし、感謝の気持ちが大きかったからだと思います。長生きしてくれて、一緒にいてくれてありがとう。

それから数日が経ったある日、私が学校から帰ると、庭に祖父がいました。どうしたのか訪ねると、祖父は驚いたような声で

「パンジーが帰ってきた。」

と言いました。残念ながら、生きておらず横たわっていたので、家の庭に埋めた。私はパンジーの姿を最後に見ることはできませんでした。なぜ再びパンジーが帰ってきたのかは分かりません。ですが、もし最後の力を振り絞り家に帰ってきてくれたなら、嬉しいと思います。

パンジーは私にたくさんものをくれました。たとえ言葉は交わさなくても、気持ちは通じていたと信じます。

人も動物も、いのちを失うのは突然かもしれません。だから、それまでに何ができるか何をしてあげられるかということを考えるのが大切だと思います。

『命の尊さと死への直面』

王寺町立王寺南義務教育学校

七年 井上 いのうえ 結衣 ゆい

最近、自殺という言葉をよく耳にする。そもそも、なぜ自殺がおきるのか。それは、かかえていた思いをだれにも話せず、死にたいという衝動にかられるからだと思う。命は重そうだが、実は軽い。なぜなら、一つの行動で簡単に命を落とせるからだ。しかし、命はそれほど簡単に捨ててよいのだろうか。周りの人の助けがあって育った命。私はたとえ孤独に感じてても決してあきらめないでほしいと思う。私はまだ十二年ほどしか生きていない。しかし、この間で得られたものはたくさんあった。例えば、家族からの支えや両親は苦労しながら私を育ててくれたということだ。

先日、私の曾祖父が亡くなった。私は「死」というものを直接感じたことがなかったので、圧倒された。「死」には一生懸命生ききったという感情があるように感じられた。それと同時に「私はまだ生きている」ことへのありがたさを改めて感じた。この「死」はとても悲しかった反面、家族が新しい道を歩む第一歩にもなった。私は、その人はすばらしいと思った。そして、生きることの偉大さにも気付かされ

た。

あなたたちの周りにはいじめられ、困っている人はいないだろうか。いじめによる自殺はいじめた人も悪いが、それに気付けなかった人にも責任があるのではないか。きっと自殺してしまった人は気付いてほしかったにちがいない。そう思った私は友達へのささいな行動にも気をつけるようになった。

「生」と「死」。それはいつもとなり同士にあり、いつ変化するか分からない。だからこそこの一分、一秒を大切に生きていこうと思う。また、「生きる」ことへの尊厳と、厳しさを知り、明日への第一歩をふみだそうと思う。

最後にいじめに対する私の考えを語ろうと思う。もしかしたら、いじめられている人は笑っているかもしれない。しかし、本当に心は笑っているのだろうか。私は笑っていないと考える。きっと笑うしかないふんい気を作り出しているのだらうと思う。だから私は生きていく上で、相手の表面の反応だけでなく、相手の心情を考え行動することを心がけたい。そして、私と相手は同じ尊い命を持っていることを忘れないでおこうと思う。

ひいおばあちゃん

王寺町立王寺北義務教育学校

八年 濱端 祐介
はまばた ゆうすけ

今年、ひいおばあちゃんが亡くなった。

ある日、ひいおばあちゃんの容態が悪い日が続き、従兄弟などの親族とお見舞いに行ったのだ。ひいおばあちゃんは介護施設に行っていたので会うのが四年ぶりぐらいだ。

施設に着き、家族ごとに順番で面会できるシステムの中、僕は最後だった。順番が回ってきて、病室に向かう時、「久しぶりに話せるな。」と思い、楽しみに向かっていた。病室に着き、驚いた。想像していた倍以上に容態が悪かったのだ。起きてはいても、目がほとんど閉じていて、「久しぶり」と言っても返答がない。呼吸も「はあ、はあ。」と荒く、呼吸に精一杯のようだった。手に触れてもびっくりするほど冷たく、いつ亡くなくてもおかしくないんじゃないかと思ってしまう。自分にとって身近な人が亡くなることを想像すると、恐怖で仕方がなかった。その反面、この状況の中、生きているうちに会えて本当によかったと思った。

少し重い空気の中、おばあちゃんの家に帰った。帰った直後、おじいちゃんの携帯が鳴った。介護施設からだ。

「ひいおばあちゃんが息を取りました。」

と言われた。突然すぎて固まって頭が真っ白になって、受け止めるのに時間がかかった。空気が今までとケタ違いに重くなり、心に「ドンッ」とくるのがあった。今まで自分を可愛がってくれたときのひいおばあちゃんの笑顔は当然見れないし、話すことも出来ない。もう遅いのに、失ってから自分の身近な人は本当に大切なものなんだと気づかされた。複雑な気持ちの中、ひいおばあちゃんは、おばあちゃんの家には運ばれてくるので皆で準備しだした。涙を流しながら手伝っている中、ひいおばあちゃんの子供であるおじいちゃんは、一つも涙を見せなかった。本当は山ほど泣きたいはずなのに、我慢していたんだろう。きつと亡くなったことを受け入れたくはない気持ちもありながらひいおばあちゃんが帰ってくるのを準備し待っていたんだ。数日後、お葬式も無事行うことができた。会えなくなってしまうのは悲しいけど、あの日に会いに行ったら本当に良かったと思った。それに、ひいおばあちゃんも、いつ亡くなくてもおかしくないような状況の中で、僕を含めた親族の元気な姿を見て安心して天国へ行くことができたんじゃないかとも思った。

この経験によって、大切な人を失ってから大切だと気づくのじゃ遅いということが身にしみて実感することができた。日常では毎日会う人や、たまに会う人もいる。でもその一度でも「会う」ということが本当に大切だと思った。常日頃人との関わりを大切にしているうと思つた。ひいおばあちゃんは僕を可愛がってくれて、大切にしてくれたんだ。どうか、天国でも元気で、温かい目で見守っていてほしい。

佳作受賞者一覧

〈小学校低学年の部〉

奈良市立佐保台小学校	一年	古森 未桜
奈良市立佐保台小学校	一年	松本 歩
大和高田市立土庫小学校	二年	岡本 夏歩
橿原市立金橋小学校	二年	辻本 洸太郎
王寺町立王寺北義務教育学校	二年	大西 圭純
王寺町立王寺北義務教育学校	二年	西 智慧
王寺町立王寺南義務教育学校	一年	江副 絢音
王寺町立王寺南義務教育学校	一年	久木崎 未怜
王寺町立王寺南義務教育学校	二年	森 菜々璃
広陵町立真美ヶ丘第二小学校	一年	田中 海聖

〈小学校中学年の部〉

五條市立五條小学校	四年	西本 虎太郎
葛城市立忍海小学校	三年	甲斐 哲司
葛城市立忍海小学校	四年	小走 秀馬
王寺町立王寺南義務教育学校	三年	畑山 晴香
王寺町立王寺南義務教育学校	三年	吉田 茉衣
王寺町立王寺南義務教育学校	四年	白杵 彩芽
王寺町立王寺南義務教育学校	四年	田中 茉衣
王寺町立王寺南義務教育学校	四年	中平 陽菜多
王寺町立王寺南義務教育学校	四年	並河 結愛
王寺町立王寺南義務教育学校	四年	松尾 優希

〈小学校高学年の部〉

奈良市立柳生小学校

六年

藤田 圓香

大和高田市立高田小学校

五年

小松 莉々

大和高田市立高田小学校

六年

高橋 一樹

葛城市立忍海小学校

六年

甲斐 菜々花

葛城市立忍海小学校

六年

田中 陽菜

葛城市立忍海小学校

六年

森 龍星

五條市立五條小学校

五年

井谷 愛美

五條市立五條小学校

五年

小家 優奈

五條市立五條小学校

五年

杉本 朝飛

五條市立牧野小学校

五年

谷村 優斗

〈中学校の部〉

大和高田市立高田西中学校

一年

岡本 優月

大和高田市立高田西中学校

一年

東野 芙海

生駒市立生駒南中学校

二年

佐々木 睦

生駒市立生駒南中学校

二年

山本 幸空

王寺町立王寺北義務教育学校

七年

稲田 愛花

王寺町立王寺北義務教育学校

七年

北 有紗

王寺町立王寺北義務教育学校

七年

志岐 美咲

王寺町立王寺北義務教育学校

八年

北 茉白

王寺町立王寺北義務教育学校

八年

藤澤 ゆな

王寺町立王寺南義務教育学校

八年

宮崎 美羽

学校賞一覧

檀原市立金橋小学校

〈小学校低学年の部〉

葛城市立忍海小学校

〈小学校高学年の部〉

王寺町立王寺南義務教育学校

〈小学校中学年の部〉

王寺町立王寺北義務教育学校

〈中学校の部〉

第三回奈良県「いのちの作文コンクール」審査委員

奈良県道徳教育研究会会長

王寺町立王寺北義務教育学校 校長

荒木 篤人

奈良県国語教育研究会会長

生駒市立鹿ノ台中学校 校長

依田 麻衣子

「いのちの教育実践研究事業実践研究校」所管教育委員会
奈良市教育委員会事務局学校教育課 指導主事

鐘 築 幸代

「いのちの教育実践研究事業実践研究校」所管教育委員会
宇陀市教育委員会事務局教育総務課 指導主事

柳 井 季子

県総務部知事公室うだ・アニマルパーク振興室長

中 森 功 征

県教育委員会事務局教育次長

小 谷 隆 男

県教育委員会事務局人権・地域教育課長

辻 智 子

県教育委員会事務局義務教育課長

吉 中 久 実

第3回奈良県「いのちの作文コンクール」
作品集

令和7年3月

奈良県教育委員会事務局
義務教育課
